

〔第25回 学術集会シンポジウムI〕

家族看護学の知のイノベーション

名古屋大学大学院医学系研究科

公益社団法人日本看護協会

(座長) 浅野みどり

荒木 暁子

日本家族看護学会は設立25年の節目を迎え、家族看護の研究や教育の推進に寄与し、多彩な研究成果が少しずつ蓄積されてきました。臨床現場では家族看護の必要性が広く認識されるようになり、専門的知識と技術をもつ家族支援専門看護師が誕生しました。さまざまな家族看護の「知」が実践に活用されつつあることも感じられますが、その一方で、急激な少子高齢化や核家族化、医療技術の進歩や地域包括ケアの推進、災害の多発など、家族や家族を取り巻く医療・社会の状況は目まぐるしく変化し、家族看護が取り扱う課題はますます多様化・複雑化しています。さらに、家族看護実践が看護界の学術的評価のみならず、社会からその重要性を理解・評価され、適切な対価が支払われるまでには残念ながら至っていません。

このような状況の中で、家族看護学は社会の変化を読み取りながら、ニーズに合わせて進化し続ける必要があります。家族看護実践を支える知識やエビデンスを集積し、活用し、実践の変革や学問的發展につなげていくことが求められます。知のイノベーションには、「知の深化」とともに「知の探索」、すなわち既存の知と知を組み合わせ、新しい知を生み出すことが必要だと言われています。家族看護の「知」の集積と活用、そして新たな創出を推進するプラットフォームの役割を日本家族看護学会が担い、家族看護学の発展を牽引していくことが期待されていると考えます。本シンポジウムでは、家族看護学のさらなる発展に向け、知のイノベーションをいかにして

実現するかを、政策、教育、研究の視点から考えていくために、3名の先生方にご登壇いただきました。

池田真理先生には、「政策の視点から：『政策の窓』が開くとき」と題し、近年の保健医療福祉を取り巻く社会の動きをふまえ、これからの家族看護学に何が期待されているのか、ニーズをどのように政策につなげていくかを焦点にご提言いただきました。

山口桂子先生は、「教育の視点から：実践知からの教育への還元」と題し、家族看護教育に携わってこられた経験をふまえ、「家族看護が見える化されてこなかった」「家族看護実践が評価の対象として見られていない」ことのご指摘があり、そのうえで家族支援専門看護師の実践事例に基づき、知の体系化に向けた「分析過程から得られる実践知の言語化の重要性」についてご提言いただきました。

瓜生浩子先生には、「研究の視点から：家族看護実践を支える有用な知を生み出すために」と題し、研究を通して家族看護学の知をどのようにして生み出していくか、有用な知を生み出すために重要なことは何かに焦点を当て、ご自身の研究を中心に発表いただきました。

たいへん本質的で壮大なテーマであり、シンポジウムの限られた時間の中で家族看護学の現状を整理し、知のイノベーションのビジョンと方略を導き出すのは困難でしたが、皆様と共に検討し続けることの重要性を再認識できたと考えます。